

立つ咽頭細菌検査成績との関係から、aBの治療効果は否定的で、むしろ自然経過と見做し得る。

3) №1, 3, 4, 7, 8, 16, 17, 20, 23, 24, 25, 27は薬剤(aP, aB)の投与時期と熱型との関係から、熱型が自然経過か薬剤の治療効果によるか判定に苦しむ症例である。前項で述べた熱型のパターンを示すものを自然経過と考えると、№4, 7, 8, 20, 24, 25, 27は自然経過の可能性が大きい。

4) 各症例の発熱経過の途中にみとめられる急激な一過性の体温下降にはaPの屯用(屯服又は坐薬)が原因と考えられる場合が少なくない。№23ではバッファリンの屯用後分利的に下熱し以後再び発熱をみていない。

対症薬剤としての解熱剤が発熱経過の短縮(治療効果)にどの程度役立つかは更に検討を要する。

[むすび]

有熱性急性上気道炎における、熱型を指標とした使用薬剤の効果判定には自然経過を考慮に入れ慎重に行う必要がある。

15. 重症心身障害児施設 収容児の体温 (I) (昭和53年初冬)

前田 和 一 (埼玉医科大学小児科)

協力者 諸岡 公子 (重症心身障害児施設「光の家」)

私共は、重症心身障害児施設「光の家」に収容されている児童を対象に、昭和53年11月下旬から12月下旬にかけて体温測定を、1患児について7日間連続で行ったので、その結果について要約する。

測定は原則として、朝は7時から8時に、昼は10時から12時に、夕方は午後4時から6時に、夜は8時から9時と1日4回測定し、同時に、測定時の室温を記載するようにしてもらった。

この施設に収容されている人員は113名であるが、その中の15歳以下59名についてデー

夕をまとめた。内訳は表(I)の如くでて重症度分類で全く動けない重症度Ⅰに属するもの31名、
(その大部分は脳性麻痺である)

(表 1)

実施期間	昭和53年11月25日 - 12月18日		
対 象	59名 (暖房あり)		
年 齢	5歳11ヵ月以下		
	6歳 - 11歳11ヵ月		3
	12歳 - 15歳		17
重症度	Ⅰ度		39
	(全く動けない)		31
	Ⅱ度		
	(いざったり這ったりして動く)		18
	Ⅲ度		
	(歩行可能)		10

いざったり這ったりして動くことの出来る重症度Ⅱに属するもの15名、歩行可能な重症度Ⅲに属するもの10名である。

(結 果)

朝、昼、夕、夜のそれぞれの時間帯の平均体温は(表Ⅱ)の如くで、各 group 間に有意差は認められなかった。

(表 2)

各時間帯における重症度別平均体温

	午 前 6時-7時	10時-11時	午 後 3時-4時	8時-9時
重症度Ⅰ	36.4℃	36.4℃	36.5℃	36.4℃
Ⅱ	36.2℃	36.3℃	36.4℃	36.3℃
Ⅲ	36.4℃	36.2℃	36.4℃	36.0℃

この施設では、12月に入ると暖房を行って、室温が大体21℃から27℃の間に保たれるようにしてあるが、部屋によっては20℃以下になるところも、28℃以上に上昇するところもあった。そこで、各室温と平均体温との関係をみたのが表(Ⅲ)であるが、各 group ともこ

(表 3)

各室温と平均体温との関係

室温	重症度 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
21℃	36.4° (N:105)	36.2° (N:73)	36.2° (N:62)
22℃	36.5° (N:157)	36.4° (N:91)	36.3° (N:73)
23℃	36.3° (N: 76)	36.2° (N:23)	36.2° (N:10)
24℃	36.5° (N: 77)	36.3° (N:45)	36.4° (N:15)
25℃	36.5° (N: 54)	36.3° (N:51)	36.2° (N:14)
26℃	36.5° (N:105)	36.4° (N:79)	36.1° (N:29)
27℃	36.6° (N: 94)	36.4° (N:30)	36.3° (N:10)
28℃	37.0° (N: 28)		

の室温のところでは、温度差による影響はみられなかったが、ただ、障害度の最も強いⅠの group では、室温が 28℃になると、平均体温の上昇傾向が認められた。

各人についての1日の平均最高体温と、平均最低体温を算出してみると、(表Ⅳ)(表Ⅴ)の如く、最高体温では重症度Ⅰの group で37℃をこすものが多くみられ平均値も高かった。最低体温では、各 group 間に有意差は認められなかった。また、平均日差では、1℃以上の変動を心すものが重症度Ⅰの group で多くみられた。

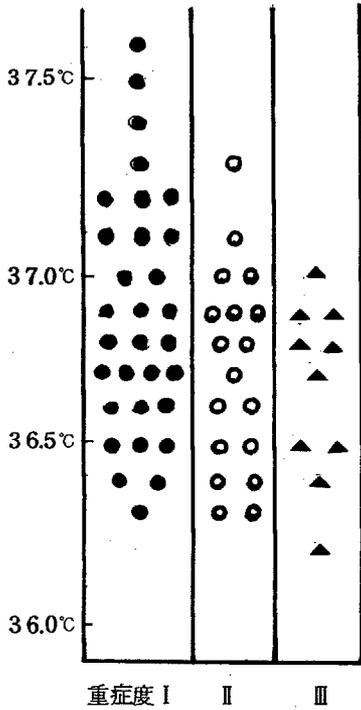
(まとめ)

以上の結果を総括すると、環境温が21℃から27℃の間では、重症心身障害児でも、健康な小児と同様な体温のパターンを示すが、重症な脳性麻痺児が大部分を占めている重症度Ⅰの group では、環境温によって体温の動揺が大きくなる傾向がみられ、とくに室温が28℃になると、平均体温が上昇していく傾向がみられ、また、体温の日内変動も1℃をこま者が多くみられた。

すなわち、重症な障害をもつ患児ほど、体温調節機構が不備であることが示唆された。

(表 4)

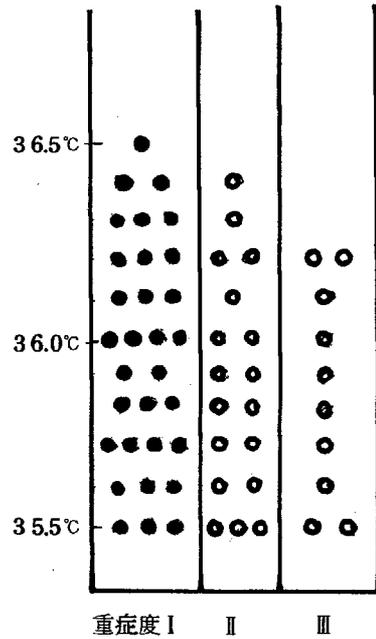
測定期間(7日)中の1日
の最高体温の平均値



平均値 36.9°C 36.7°C 36.7°C

(表 5)

測定期間(7日)中の1日
の最低体温の平均値



平均値 35.9°C 35.9°C 35.9°C

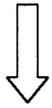
(表 6)

体温の平均日差の分布

	0.5°C以下	0.6~1.0°C	1.1~1.5°C
重症度 I	1	22	8
II	2	15	1
III		10	



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



(まとめ)

以上の結果を総括すると、環境温が 21 から 27 の間では、重症心身障害児でも、健康な小児と同様な体温のパターンを示すが、重症な脳性麻痺児が大部分を占めている重症度の group では、環境温によって体温の動揺が大きくなる傾向がみられ、とくに室温が 28 になると、平均体温が上昇していく傾向がみられ、また、体温の日内変動も 1 をこま者が多くみられた。

すなわち、重症な障害をもつ患児ほど、体温調節機構が不備であることが示唆された。